

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと 風

第184号（2021年9月）



白井啓治

(二二) 土に遊ばれ快感を得る

(2008年9月11日)

『雷の吼えて稲妻の走って蟬のぬけ殻』

9月の声を聞いた途端、夏が戻ってきたような陽気が数日続いている。虫の声も賑やかさを増してきている。

今年は、春から毎日は無理だが週に1〜2回、石岡市瓦会で自給農園をやっている名古屋からやってきた松山さんの所へ百姓をやりに行こうと考えて、計画していた。

ところが、3月末にことば座の脚本執筆の取材で石岡市真家にある馬滝に、俳優の小林さんと出かけ、山の中で酷い貧血を起こし、3〜40分意識不明になってしまった。意識不明に陥る貧血はこれまで数回ほど起こしているが、ここ何年かは立ちくらみを起こすこともなくすっかり忘れていた。それで小林さんにも、話すことを忘れていた。だが、アクシデントとは予兆もなくやってくる。滝の散策中、突然に起こってしまった。小林さんが居なかつたら、脱力したまま崩れ落ち、滝に転落し岩に頭でも打ちつけ命を落とすところであった。

百姓は4月からと考えていたのに、止められてしまった。私が低血圧で貧血を起こすことがあるなど知らされていなかった小林さんには、大変な驚きとショックを与えてしまった。私の心拍と呼吸が安定したことを確認して、村に降りて、助けを呼んできてくれたのだ。筆談でしかコミュニケーションのとは容易に理解できる。

その時にお世話になったお寺の住職と村の方には、ここに改めてお礼を申し上げたい。

そんなわけではなかなか百姓に出かけるお許しをもらえなかったのであったが、9月から、週1回、百姓に行くことのお許しがでた。



(絵：兼平智恵子)

先週第1回目に出かけてきたが、大汗をかいて土

に遊ばれるというのは実に気持ちのいいことであった。百姓に出かけるといっても、雑草むしりぐらいしかできないのであるが、そのうち自分の食べる野菜は自給しようと思っている。

そして、劇団の稽古場ができたら作った自給野菜で軽い食事とコーヒーでも出せるような私の道楽コーナーを持ちたいものと思っているのだけれど、はてさて如何な結果が待っているのやら。

かなり以前のことである。気象学者が書いていた本だったと思うが、異常気象と騒ぎ立てるが、実は何も変ってはいないのだ、というようなことが書かれてあった。古い本だったから、何時の頃の話かはもう記憶にない。その本の趣旨はこうであった。「地球全体の平均気温は何も変わっていない。局地的に移動しているだけで、それを世紀末のように面白おかしく書きたてている」だった。だから随分前に書かれた本だろうと思う。

しかし、今は違う。地球の平均気温がドンドン上昇し続けているのだから、異常気象が起きて当たり前なのだ。その著者が、今も健在だったとしたら果して何と書くのだろうか。「これは本物の異常気象です！」と絶叫するかもしれない。いや、絶叫するだろう。

(本稿は故白井啓治氏の常陽新聞に2008年7月より約1年間に亘って掲載されたエッセイを載せています。)

地域に眠る埋もれた歴史(72)

木村 進

【6 真家・瓦会・有明地区】(3)

6.4 貴船神社(嘉良寿理)

石岡の山崎から部原(へばら)を通って瓦会(かわらえ)への道は鐘転山く難台山く吾国山の山並みの麓を通っています。これに対し柴間にあるギター文化館のある高台を平行に通る道は昔に宇都宮街道と言われた道だと思われず。はつきり書かれたものがないのではつきりしないのですが、この街道の途中の嘉良寿理に「貴船神社」という神社があります。



この高台の道は吾国山、難台山、(愛宕山)、鐘転山などの山並みを望む素晴らしく景色の良

い道です。また丘に広がる麦畑などの雰囲気が北海道の富良野などを思い出すという人も多いところ。神社はギター文化館から少し石岡市街地方面にいった嘉良寿理(からすり)地区の入り口から丘の上に少し上った場所にひっそりとあります。

貴船神社という名前の由来はよくわかりませんが、沢が流れているわけでもありません。しかし昔はそのような川があつたのかもしれない。貴船神社といえは京都の貴船神社が総本山でしょう。神社は無人ですし管理も毎日掃き清めているようではありません。落ち葉が周りに散っていました。そしてこの神社には大きなスダジイの木がそびえています。樹齢はわかりませんが、市内の大木の中でも横綱級といえます。確かに大人が二人で腕を組んでも木の周りを囲むことはできそうにありません。昔、この神社の下を宇都宮街道が通っていて、この神社の大木の下で休んだという記述がこの大木に説明版に書かれています。

また市内若松にある道標に国分尼寺方面に「右うつの宮かわらい道」と書かれていますので、昔はこの道が続いていたのだと思われず。

この神社の前を少し上に上るとカラツとした畑が一面に広がり、急に視界が開けます。

この上からの畑と山並みを見ることも好きな場所です。比較的最近まで自家用飛行機などが降りられる飛行場が近くにあったという話も

あります。さて、この「嘉良寿理」ですが、これも難読地名ですね。「カラスリ」と読みます。「八郷町の地名」は平成15年12月に発行されたのですが、ここには次のように記載されています。

「元禄郷帳には鷹爪、天保郷帳では烏瓜、新編常陸国誌では烏瓜(加良須宇里)、明治17年の陸軍部作成地形図は加良須里とある。現在は嘉良寿理と表記している。本来は「涸州里」で水の少ない谷津地集落の意であろう。一方では「唐住里」で大陸渡来人の住んだ集落説を唱える説もある。

集落の北側台地上には、瓦谷街道(後宇都宮街道)の古道があり、街道沿いには茨城県指定文化財の嘉良寿理経筒出土地、旧嘉良寿理村貴船神社がある。・・・近世旗本領・・・天保14年の戸数は16戸である。」

とあります。この場所を谷津地(恋瀬川支流の一つの源流地)と見るか、まったく別の見方があるのか?

インド、中国、韓国などの地はすべて唐という見方もあります。「涸州里」で水が少ない地というのであればこの貴船神社がある理由が見当たりません。

この宇都宮街道は「瓦会街道」とも呼ばれました。瓦会からこの高台に瓦を持ち上げてそこからほとんど高低差がなく石岡の街にある国分寺などへ瓦を運ぶことが出来たと考えられ

ます。ギター文化館の前の畑に「経筒（石櫃付き）」出土地という立て看板が置かれています。これは柿岡の中央公民館で展示保管されています。発見された経筒には「大永3年（1523）、甲州高屋住道善 小聖善貞」と刻まれています。

海外旅行の思い出(4) 木下明男

初の海外旅行、南ベトナムへ・・・

今から40数年ほど前になりますか？1978年1月18日雪がちらつく中、全国から集まった124名の労音代表団（第一便）が、全日空のトライスター機で羽田を出発。機には、ベトナムへ寄贈するレコード制作機械のカッティングマシーンが積み込まれている。6時間ほどで、トライスター機はホーチミン市（タンソニユット空港）に到着。機の窓から地上を見ると、田圃と思われる彼方此方に大きな穴が開いている風景が広がる。戦争の傷跡がまだ生々しい？飛行場は、数年前は戦場の真ただ中、今はガラソンとした荒れた広大な広場に見える。そんな中に、トライスター機は着陸、一台の黒塗りの大型車が待っていた。代表団は、空港を歩き入国手続きを・・・黒塗りの車から、笑顔で女性が降りてきて、歓迎のハグを・・・そして団長さんはこの車にと・・・戸惑う内に、空港の建物に着く。改めて、出迎えた女性（ホ・チミン市副市長）から深紅のバラの花束が贈られた。現在アメリカ軍は、アフガニスタンから撤退

を決め、大混乱を極めている。40数年前も同様に、アメリカ軍がベトナムから撤退を決め、大混乱の中アメリカ軍や軍関係者、そしてアメリカに協力した傀儡軍関係者たち・・・？今報道されているのと、同じ景色を見ていた。そして、その後何年もベトナム難民たちが、小舟で脱出を企て日本まで辿り着いた者たちもいたようです。歴史は繰り返すといいますが、アメリカは懲りないですね・・・？

代表団は、二組に分かれ行動することになった。私は代表団の団長でもあるので、ホーチミン市最大のホテル「トンニヤット（統一）ホテル」第二班はクーロンホテルに分かれての宿泊です。このツアーは、アメリカに勝利したベトナム人民を支えた、民族音楽や文化活動を学ぶことです。解放後2年ほどの街は、復興にはまだまだ遠く、彼方此方の建物や人々の生活は悲惨なものです。行動は原則バス異動で、食料兼医療の貨物車が付属着いています。それでも、治安は保証され自由散策もでき、露店での買い物なども楽しんだ。滞在中見学した処は、クチ（メコンデルタに広がる解放戦線の拠点）、レミンスアン（新経済村）、ミト（永長寺）、ブントオ（海水浴ができる保養地）等々です。クチは、解放戦線の兵士たちがジャングル等の移動に使用したトンネル（全長200キロと言われている）このトンネルを利用して、神出鬼没に現われてゲリラ戦を行い、圧倒的な機材のアメリカ軍を悩ませた。米軍は、此の塹壕を破壊しようとして躍起になり、低空でヘリを飛ばしたが、逆に小銃等で撃墜されたとか？遂にお手上げとなり、解放戦線に負けた原動力のようだ。私

たちは、このトンネルに入り、移動体験をした。トンネルの中は、超狭く・・・（直径60センチの場所もある）移動は匍匐になり、強大なアリ（1センチ）に噛みつかれ全身腫れ上がるオマケ迄あった。

レミンスアン新経済村では、文工隊や文芸隊、若い労働者との交流で、心を通い合わせる事ができた。経済村と言っても、大きな砂地にパイナップル畑、全部が人力で大きな機械は全くありません。ミトでは、ヤシ道教と言う怪しい宗教寺があつて、原色をゴテゴテ塗りたくった建物。アメリカ傀儡政権との癒着で金をつぎ込まれたようだ。そんな新興宗教と違って永長寺は、周囲を大樹で囲まれた大伽藍は侵し難い気品に満ちていた。本堂の仏殿に脚座があり、その台に扉が付いている。背面に秘密の扉があり、開けてみると秘密の通路が隠されている。そこには、解放軍の幹部3人が匿われ、案内をしてくれた師が、2ヶ月に渡り食事の世話をしたとの話を聞かせてくれた。

ブントオ（海辺のリゾート地）では、代表団皆で海水浴を楽しむ。わずか数日前は雪がちらつく中の出発だったのに・・・地球の広さを感じた。私たちが水着で泳いだり、相撲をしたりして燥ぎまわる姿を、ベトナムの人たちは遠巻きに、そして珍しそうに眺めていた。無理もない、解放されて2、3年、まだまだ余暇を楽しむ余裕もないし、外国からの観光客も皆無なのだから・・・？

ベトナムでの給料は、1ヶ月60〜70ドン（1ドン110円）、今回ツアーの一泊分。しかし、税金はなく住宅費や他の生活費も安い。保

育費も月3ドンを、参加者の女性からは、医・衣食住で頭が痛い日本の生活よりずっと良く、寧ろ羨ましいと言っていた。解放されたベトナム人民は、アメリカ帝国主義に汚された南の大都市「サイゴン」に、革命の親の名をとり、「ホーチミン市」と言う称号を贈った。

この年の夏、ベトナム国立歌舞団を迎える(全国40公演)大きな力にしようとして、全国から募った代表団250名は、其々が感動を持って各地に帰り、歌舞団公演成功の大きな力となった。そう言う意味でも今回のツアーは大成功だった。

人が育っていくって？ 伊東弓子

暑さも、災害も、コロナも それを受け止めていかねばと思いがちでも、どこか他人事と片付けているのが人間の本性のように思う。そんな中でもオリンピックから感動は受け入れていた夏だったが、一地域として大きな喜びを与えてくれた夏でもあった。教育長が変わった。私にとつて改めて地域の教育を考える機会になった。具体的にとか、理論的にとか、上手に説明はできないが、長い体制が続いていくことが膿を溜めていくことになるから、本当によかったと喜びたい。

忙しさにかまけて、世間の話しを聞いただけで、「そんなこともあるのか」と、教育委員・教育長の一面を見てきたが、これを機に見詰め直してみよう。小学校の頃、村の三役は、村長、教育長、収入役だと聞いたことがある。子育ての頃、学校や先生への不満は直接教育長に訴えた方がいい、

先生に言うとは、子供が憎まれるからという話には驚いた。教育長が変わると先生方が挨拶に足繁く通うとか、はっきり分らないことを言っていることを聞いた。教育委員もここ何年どうなっているのだろう。数年前の地域の委員には驚いた。中学校の運動会で久しぶりに会ったので近づいて挨拶しようとするとか外方を向いてしまった。私に遺憾でもあったのだろう。悲しかったが、ぐっと我慢して立ち去った。今尚すっきりしない。委員を続けているのだろうか。若い頃のこんな情報も耳に残っている。東京、中野区の人達が「教育長は行政役人ではない、区民で選ぶべきだ」と運動している情景だった。その頃の私は、「地域のことしか知らない田舎者、周りにそれ程の気遣いも立ち上がってない中で、そのままにしてしまった。ところが今回「玉里村史」の中に歴代の教育長のお名前が詳しく載っていた。今まで有耶無耶になっていたものが、本当にすっきりした。

記憶に残っている教育長の姿を思い出してみた。U教育長は、真面目という姿しか覚えがない。接点がなかったからかもしれない。

S教育長は、愉快な人手、場づくりの上手な方だった。会議の後には必ずお酒が入り、歌が出、踊りも加わった。地域の延長そのままの姿だった。そんな中で、仲間の力関係も強まって行ったのだろう。私達青年はよく勉強していた時代だったにもかかわらず、学校教育のことは良く知らなかった。その後も、村長、地元の人が多く教育長になっていた。

O教育長は、長い教育場で仕事をしてきた人だった。私のことをあちこちで聞き回していた。「由美子はどんな人達と付き合っているのかな、どんなつながりなんだろう」と、丁度、「よい映画を見る会」を友達と立ち上げていた頃だった。

U教育長はと玉里の文化活動のことで話しが弾んだことがあった。

H教育長の頃、玉里村だけで物を考えている時期ではなかった。ご苦労が多かったようだ。真面目なお仕事振りは覚えている。

T教育長は個性的、勿論多くの面に長けた方ですが余りにもお偉くなってしまつて、怒鳴られたり屈辱を受けた人は数多く、周りはピリピリしていたようだが、でもご自分が指摘(ある議員)されると、大変だったのでしょう、今尚根に思っているらしい・・・と耳にする。ご自分のことは分らないようだ。

M教育長は、行政のいいなりでなく、毅然とした姿勢で地域の教育に当たりたいという方だったが、志し変れられずお辞めになったのは残念。詳しい事情はわからない。

A教育長は、大きな仕事を抱えてご苦労多かったことだろうが、若い議員に「その質問は省いてほしい」との言葉には非常に残念だと感じた。多くの教育長のことは、私には本当にはわかっていないのかもしれない。でも、教育長の使命は忘れてほしくないと願う。新しい教育長と委員に大いに期待し、市長も学校教育のみならず、社会教育、人間教育も考えていただきたい・・・けれど難しいだろうなとも思う。

市そのものも長く古い体制を打ち破って、新しい体制づくりに一飛してほしい。教育長の姿勢が現場で教育に携わる先生にどう影響するか考えながら、わたしの長学・中学・高校時代、昭和二十二年〜三十四年までを思い出してみ

た。夏休み、冬休みは、植物・昆虫採集、写生にと
出歩いて休みの終わった後が楽しかった。男性が事
を起こすと連帯責任と称して、やった者、やられ
た者、見ていた者、みんなに責任がある。という
ことで「回しびんた」という方法で、お互いを戒
める男の先生に驚いた。ある先生が体操の授業で、
手の悪かった私に（先生の思いだったのかもしれ
ないが）「鉄棒はやらなくてもいい」と言ってくれ
たことがあったが、私には屈辱のようにも感じた。
高校になって体操の時間に、私は自分から「手が
悪いので・・・」と言った。すると「手が悪い、
それがどうなんだ。やってみなさい」との声が響
いた。鉄棒が終って出来た喜びと、先生の言葉に
勇気を出す喜びを貰って涙が止まらなかったこと
を覚えてる。戦争体験をした先生からは、戦争・
平和・天皇制などの話を学び、やがて社会に出て
いく心構えなど放課後、話しは尽きなかった。こ
の年令になっても忘れられない先生だ。

仕事に追われ、躰けも出来ず先生とのつながり
も薄かった子供の学校時代、昭和四十年代後半か
ら平成三〇四年の頃、子供たちはいろいろな苦し
さ乗り越えてきたようだ。誉められることの多
かった子にとって「これみよがし」に皆に話され
る辛さは、とてもとても苦しかったと、今頃にな
って聞いた。小学校上級生の時の進級式に受け持
ちの名を聞いた途端、みんなで「やった！」と大
声を出して喜んだそうだ。中学のときに便所の掃
除を丁寧にするので力を入れていた男の子、次
の日ある親が猛攻撃してきたとかで、先生は力
を落としていた。その先生をみんなで励ましたん
だ、と聞いて棄てたもんじやないと誉めたことを
思い出す。その子が上の学校へ行って、事故で長

期欠席となった。担任は、授業の日数・出席日数
の事ばかり話していたが、校長先生は「お母さん！
学校は社会に出ていく、一人立ちしていく、準備
の為にあるんです。生命のあったことを有難く思
って、先を見てあげましょう。」と声をかけての温
かさは今も耳に残っている。天真爛漫だった元氣
なあの子は、中学校でのいじめ（上級生）から一
変した。女の受け持ちの先生が私に「あんなこと、
よく出来るわね」と聞かされた時、こんな先生つ
ているのかと驚いた。良い子・出来る子にはいい
が、一旦悪くなった子のことは見向きもしないと
後になってわかった。その分、教頭先生が力をか
してくださった。あの小柄な姿、学校から役場に行
く（二百メートル位）道々人に声をかけ、塵を
拾い、私ばかりでなく妹達にも声をかけてくれた
方だった。高校生活の中で「見せしめ」という形
で、全校生徒の前で壇上に立たせるやり方の生徒
指導の先生には、勿論信頼はなくなり、その場に
止まる事なく、学校を去る結果になった。あんな
扱いを恨んでいる私だが、これも学校教育の一つ
なのだろうかと、恐ろしくなる。泣き虫だった子
は学校へ入ると元気になった。黙々と自分のやる
ことを進めていった。沢山辛いこと、淋しいこと
もあつたらうに聞いた事がない。否、言い出す間
がなかったのだろう。姉兄がいることで比べられ
る子にとつてもそれなりにつらさが山ほどあつた
ようだ。「お姉さんは出来るのに、あんなこんなこ
とも真面に出来ないの」と上級生のしごき、「お姉
さんと随分違うのね」という美術の先生、描くこ
とが辛かったと、聞かされた。でも今、明るく生
活している。

孫の時代になると平成中半から現在に繋がって

いる。それぞれ親がいて婆さんが出るまくではな
いが、婆さんなりの役目もあるう。子育ての行き
届かなかつたところを補なおうとしても無理なこ
と、控えめに控えめにいこう。時代のせいとか、環
境の変化もはげしい家庭的に苦労も多いようだ。
自分の進もうとする所をめざしていつてね。でも、
力のなくなってきた婆さんをたまーに振り向いて
ね。

日本の孫の中で義務教育を終った孫。玉里中学
校も、玉里小学校も閉じられた三月。四月からは
玉里学園の小中一貫校が発校した。この最後の卒
業式の後にとても良いことがあった。一つは二年
生の時（韓国から移ってきたばかりの時）何度も
聞いたM先生からのお祝いの花がかざってあつた
こと。きつとこの先生はつらい孫によりそつてく
れたのだろう。もう一つは、小学校でお世話にな
ったO先生に挨拶してくるとのこと、よく気がつ
いたと母親と私は喜んでた。間もなく「授業を
しているから、後で話しておきます」と事務の先
生に言われたとか。これは・・・と思つた瞬間。
「このまま帰りたくないよね」「そうだよ」「よー
し、ここから先生に挨拶しよう」ということにな
つた。三人で「O先生有難うございました。お世
話になりました。卒業できました」三人とも大声
で気持ちよかつた。すると三階中央辺りのドア
があいて「おめでとう。これからも頑張れよ」と
いう声が伝わってきた。そして手を振ってくれて
いた。嬉しかった。これが教育だ。と歓声をあげ
て別れた。事務の先生の対処の仕方は教育に携わ
る一人としては、ちよつと残念だった。先生と子
供のつながりが素晴らしい瞬間、孫は先生の姿と
声を一生忘れない事だろう。

人と人のつながりを良しにつけ、悪しきにつけ人が生きる上で思い出すことだろう。新しい教育長に期待し、私達も学校教育のみならず、良い人づくり、良いつながりを作っていきたいですな。

古里は春の夢

兼平智恵子

「ふる里とは、恋の降る里であり、物語の降る里のこと。この地をふる里と思うのであれば恋も物語もたくさん降らせなければ」と。

ふるさと風の会、故白井啓治代表は、ふる里の物語 百を目標に三十余りの物語を残しています。そしてその物語を聳の小林幸枝さんと共に、白井代表が朗読をし、それを小林さんは手話で舞うと言う「朗読舞」という新しい舞台表現を考案しました。物語のあらずじと舞の様子、背景画(担当 兼平)を織り交ぜながらご紹介します。

先月号からスタートしまして、今回は「ふるさと童話 霞ヶ浦の赤い鯨」でした。

今回は、前回と同じ背景、舟塚山古墳をモチーフにした奇想天外な常世の国の恋物語です。

「ふる里は春の夢」

二〇〇六年十二月十日発行

著者 近藤治平 (白井啓治)

発行者 小林幸枝

「あなた様へ。」

今日は風も温かく、春霞の先に望まれる筑波の峰も朧な薄紫の色に刷かれております。桜の花も今日が盛り。吹雪となつて舞っております。桜の花の終わりの今日、あなたさまの愛しておられます

ふるさとの風景、舟塚山古墳にお招き申し、古里は春の夢を献上いたしたく存じます。」
不思議な招待状に舟塚山古墳に出かけていった男女に、幻想的な春の夢が献上された。
近藤治平 (白井啓治) のふるさとの夢が舟塚山古墳に繰り広げられる。



不思議な春の夢のような中で語りあうのです。

「人という文字は二人で支えあうという形ではなく、未来に向かって二本の足であるくという形を示したものだと思うのです。漢字の成り立ちを見ると、立っている人が屈伸して手をだらりと下ろしている様に着目して、とありますが、未来に向かって歩くという方が夢を感じませんか。」

人というのは互いに支えあうために二人でいるのですが、未来の夢を暮らしという形で紡いでいくのが与えられた本来の姿と考えると、支えあっている二人とは実は一人なのだと思います。そして、支えあうとは、倒れないように手を取り合っていることのように思います。

それでは『一人は二人、そして二人は一人』だと思っただけです。もしかしてこのようになれる人を心のどこかで探し求めているのかもしれない」
穏やかな静寂が二人を包む。

果たして幻想的な春の夢を献上されたお二人の行方は……。

ふるさと風の会文庫 古里は春の夢 をどうぞご覧ください。

古里は春の夢より一部抜粋

先月号に引き続き、石岡市の宝物、舟塚山古墳の被葬者について知るもう一つの手がかり、古墳の形についてご案内します。

全国各地の前方後円墳には大王(天皇)の古墳とよく似た「縮小コピー」のような古墳があり、これは、天皇をはじめ有力者と関係を結んだ証しとして有力者の古墳の設計図を与えられ、同一の設計の古墳を造る事が許されたと考えられています。

舟塚山古墳の最新の測量図をもとに検討すると、奈良県広陵町の巢山古墳とよく似ています。巢山古墳は「葛城氏」の墓と考えられています。葛城氏は天皇家と婚姻関係を結んでいた豪族だ、当時の政権は天皇と葛城氏との連合政権であったという説があるくらい有力者でした。

舟塚山古墳の被葬者は、天皇よりも葛城氏との関係が深く、葛城氏から茨城の統治を任された人物だったのかもしれない。

この時代の天皇は応神天皇と言われています。築造時期も今までは六世紀中葉前後（五五〇年前後）とされてきましたが、出土した朝顔形埴輪に付着している「黒斑」や採集されている短甲形埴輪の破片などによって四世紀末から五世紀前葉と考えられることになりました。

どうぞ、標高三四・七m（石岡市の台地は二五五m）の古墳、たずねて見て下さい。

参考資料 舟塚山古墳とその時代

時の記憶シリーズ一六四

○デルタに追われてもう秋 智恵子

沖ノ島

小林幸枝

沖ノ島は千葉県館山湾の南側に位置する周囲約1kmの小さな無人島です。島といっても島へは砂浜を歩いて渡れます。

島内は、歩いて約30分もあれば1周出来てしまします。周りの海は透明度高く、透き通っていて生息している海の生物がきれいに見えます。

島内には、戦時中に作られたといわれる洞窟があり、全長は10mほどで、内部にはいくつかに分れた小部屋があります。また、洞窟の壁面は年代を現す、たぐさんの地層のラインをはっきり見る事ができます。

この島は、元々は陸から離れた沖合にある島でしたが、関東大震災による地面の隆起などにより陸続きとなりました。またタブノキなどの温暖帯の海岸林とインゲンチャクなどの海岸動植物が共存する特殊な生態系を見て楽しむ事ができます。

またサンゴの世界北限地域ともいわれています。また、この砂浜では夏に海水浴場としても人気で、多くの人が訪れます。

また、岩礁があり、子供達も磯遊びが楽しめます。

皆さんも是非一度訪れてみてください。珍しい生き物と出会えるかも……。

島内の神社：沖ノ島宇賀明神（うがみょうじん）、嘉保3（1099）年にこの地域の発展を願って建てられたといわれる。産業の神である倉稲魂命を祀ります。

裏には高さ18mにも及び椎定樹齢300年のご神木でタブノキがそびえています。

眺めが美しく、とても歩きやすい沖ノ島でした。



新たな挑戦 6

菊地孝夫

落ちていた栗を拾ってきて煮た。住宅街の中の小さな栗の畑。囲いの外に落ちたままになっている。もったいない話だ。自転車を止めて拾い集めた。4、50個あるだろうか。

ペランダの、手作りプランターの山百合が開花した。

（オリンピック）

ひまなので、オリンピックの特番を見ていた。もっぱら女子選手の活躍する姿を見ていた。

トップアスリートたちの驚異的な身体能力は、すごいものだった。

（当然、日本人選手の出場する競技の中継が中心だった。）

以前と違うのは、ビデオ判定が多く取り入れられたことだろうか。審判員の目が届かない微妙な判定が、ビデオによって覆されるケースが多かった。

新体操などのような、複数の審判員の採点が左右する競技は、解説を聞いていてもよくわからない。

ドイツチームは、体を露出するコスチュームをやめた。

女性に対するセクハラめいた競技に異論を呈したのだろう。

人種差別に対する異議も、サッカー女子が意思表示した。

（なでしこジャパンもこれに賛同した。男子選手

はどうした？柔道・山下に代表される男子選手は何も考えていない。上には意見が言えない、体育会体質が相変わらず残っている。」

札幌で開催された、マラソンと競歩では途中棄権者が続出した。

東京湾の、大腸菌だらけの汚い海水の中でトリアスロンの遊泳が行われた。海水の中にコロナ・ウイルスが紛れ込んでいないとは、誰にも言えない。

金メダルをかじった、馬鹿な名古屋市長・河村たかしもいた。

パラリンピックも予定通りに開催されたが、せめて数か月時期をずらしてもよかったのではないだろうか。

コロナ禍の中で、この時期に開催する必要があったのだろうか？

開会セレモニーの演出もひどいものだった。日本のエンターテインメントの質がこの程度のもだったか。出演依頼を断ったアーティストたちも多かったです。

同時に出てきたボランテアの服装も、いたたけない。うんざりして途中で見るのをやめてしまった。

アメリカでの視聴率も最低だったようだ。オリンピックの開催をゴリ押しした結果が、こうなってしまった。

IOCなる組織が、利権がらみのろくでもないものだとということがまざまざと証明された大会となった。

IOCも右へ倣えと言えよう。オリンピック開催によって、関係者の懐にはどれだけの金が転が

り込んだのだろうか。

「安心安全な大会」だったはずが、多くの新型コロナウイルス感染者を産んだ。実際のところ、公式な発表より多くの感染者が出たことだろう。IOCのスポークスマンの発表など信用はできない。このような結果になることは、判り切っていたはずなのに。

関係者にはかん口令が敷かれたのだろうが、どうしても情報は漏れてしまう。呆れるような対応が次々と出てきてしまう。

新型コロナウイルスの蔓延には影響ない、と強弁していたがそんな訳は無かるう。

バツハ会長に代表される、一部の者の利権の為に、多くの犠牲者を出してしまった。

東京都は、小学生のパラリンピックの観戦まで「強制」している。いったいどういう神経なのか。

関係者の精神を疑う。テレビで観戦すればいいだけの話だろう。

はつきり言ってだれがみても今回の大会は、まじめにみる大失敗だったと言える。

経済的に見ても、プラスとなったとは言えない。オリンピックの経済効果は、もうない。逆に終了後の反動が来るだろう。

スポーツによる感動を期待していたのだろうが、それは連日報じられる感染者の拡大で、あっさり消し飛んでしまった。

スポーツに於いては、相手に勝つ、記録を伸ばす、それ以上のことはできない。競技をすることによって、人格が形成されるとかいうのは絵空事である。

無観客によって、ニッポン・チャチャチャの大

合唱がなかったのがせめてもの救いである。

風と共に 《理》

大輪啓展

毎月違ったテーマにて書かせて頂きます。

今月のテーマは、「表裏」

皆様こんにちは、新型コロナウイルスは猛威を振るい続け、いつまた穏やかな日々を迎える事が出来るのか、幅広い業種の方々も大きなダメージを受けている事と思います。

ワクチンの普及による混乱の撤廃が図られれば良いのですが、先の読めない元凶に辟易してしまっています。

それぞれの置かれた状況にて、最悪な毎日をごしている方にも、1日も早い安寧を願っております。

物事には必ず、表と裏があります。

それは、あらゆる事に当てはまります。

何かに成功して一躍有名となった方、事業に失敗して何かを失った方、日々何の不自由も無く生活している方、毎日寝る間を惜しんで働いている方。

何が良くて何が悪いのでしょうか。

親の遺産を相続し、死ぬまでにはとても使い切れ

ないお金を手にした私、自分では何一つ出来ず全て誰かにしてもらう、ゴロゴロと役目も果たさずただ過ぎていく日々をぼーっと生きていく。これって幸せ??

お金は無くとも、日々の生活に追われ朝から晩まで働き、自分の事は自分でする、他人に迷惑は掛けたく無い、でも家族や友人とは良い関係を築き、貧乏ながらも笑って生きていく。これって幸せ??

無いよりは有った方が良い、勿論そう思います。でも、有り過ぎて無過ぎても、どっちもどうなの??って

産まれた環境はどうしようもなくとも、置かれて状況はどうにかできる。

『為せばなる 為さねば成らぬ 何事も 成らぬは人の 為さぬなりけり』

江戸時代の藩主、上杉鷹山の言葉にある通り、

どんな事でも、強い意志を持つて

どんな事でも、強い意志を持つて望めば結果は付いてくると、少なくとも腕き抗いながらも前に進もうとする事が重要では無いかと思います。

世の中、自分の望む通りになる事は殆どありません。悲しいかな、おおよそ皮算用です。

歳を重ね徐々に明らかになる仕組みでは有りませんが、先程申しました通り、そんな事は気にかげず、無我夢中に何かに向かった人は、何かを得

ながら何かを失って行くのだと思います。

平凡なゼロが始まりだとして、+1にしようとするれば、-1の作用が働きゼロに戻そうとする、ですから裕福な+100を目指せば、その反作用として-100の苦痛が訪れると言った所でしようか。

今皆さんは、何もせずゼロで居続ければ、平穩で安寧な生活が送れるのではないか、そんな風に思いませんか?

残念ながら、ゼロで居続ける平凡な生活を送る事は最も難しい事なのです。

と言いますのも、何もしなければゼロのままというのが間違いなのです、必ず日々何らかの試練があり、逃げだしたり避けたりしていると、日々-1ずつ-1を積み重ねているのです。人生楽は出来ません。

そして、社会通念としてのゼロと、皆様それぞれのゼロも必ずしも一緒とは限りません。

ですから、ゼロで居続けるのはとても困難であり、ある種の幸せを望むので有れば、その困難な道のりでも目指す価値はあると言う事です。

あくまでも私個人の思考に依るものですが、欲は尽きる事ありませんし、好きに生きたら良いんですが、ちゃんと地に足を付けて、他者に迷惑をかけず、他者を陥入れるのではなく、上を目指したい方はそうすれば良いと思います。

【風の談話室】 《読者投稿》

やわら暮らし (55)

やわら女

暑い暑いの日々が続く……。こんな時期にコロナワクチン接種が……。接種後2, 3日は接種箇所痛みがあったが、大過なく過ごせた、此れで一安心かな???

雨が止んで暑さが戻って来た。今日は朝から竹細工の日。お花や果物や野菜たちに囲まれた作業小屋でミニ籠づくり。帰りにはゴーヤやカボチャのお土産をいただいて、竹ひご作り頑張らなければ。

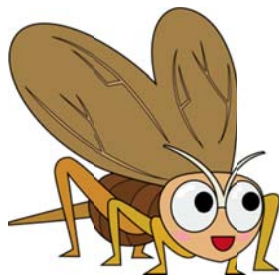
雨が続きます。庭のサルスベリが深く頭を下げて、きのうは水槽にカワセミが来て魚を眺めていた……。と、夫が二度も目撃したと言っていた。カワセミは初めての訪問者、近くの池ではたまに見かけるようです。綺麗な色をした鳥(翡翠)ですよね。

・庭のブドウ棚・・・無消毒の果実。このまま食べられる所までいけるか。去年は病気に負けたが……。

・知人が家庭菜園のスイカを持って来てくれた。スイカは受粉から35日から40日が収穫時期だと言われている。受粉の日を書いておかなかったのだ、食べ頃か不安だと言っていたが割って見ると、見事最高の食べ頃だった。

・今年には玉虫がよく飛んでくる。今日も庭の草と
りをしていると、何を間違えたか肩に止まった。
光の具合で緑色や赤が輝いてとてもきれいだ。

・今朝の筑波山上空 大きな笠雲、今日も良い日
ありますように。連日の猛暑たまりませんね。今
日も真夏日、部落の草刈り日だが、若い人ちらほ
らしかいない、老年者多数・・・みなさん大丈夫
かなと思いつつ覗いてきた。



おすすめの本 6

燕石(えんせき)

連日の暑さにかまけてしまって、今月は本を読
んでいません。というか、読む気がわかないと
言ったらいいのでしょうか。

何年かのサイクルで筆者に起きる、無気力症候
群と言ったらよいのでしょうか。或いは、新型コ
ロナの蔓延に起因する、ネガティブな風潮に染ま
ってしまったのか。

いずれにしてもいい兆候とは言えないのですが、
何とか気力を奮い起こして、一文を書こうと思
います。

そこで、今月は、(苦し紛れなのですが)おすす

めの本の代わりに、映画を一本ご紹介することに
しましょう。

DVDに収められた映画は、最新のヒット作を
除けば、数百円という比較的手軽な値段で購入す
ることができます。レンタルで借りることも、イ
ンターネットで手に入れることもできます。

映画好きの筆者としては、これはうれしい限り
です。

特典映像として、NGシーンや、インタビュ
画像が付いていることもあって、これを見るのも
楽しみの一つです。

題名は「The 5th Wave」

2016年のアメリカ・コロンビア映画会社の
製作によるSF映画です。

「第五の波」とでも訳せばいいのでしょうか。

ここで映画のあらすじを紹介しますと、

ある日突然、地球の上空四百キロに現れた、全
長数百キロに及ぶ正体不明の巨大な宇宙船。

太陽の光は遮られ、その宇宙船によってもたら
される、地球規模の災害。地震や津波、そして深
刻なウイルスが原因の疫病が広まっていきます。
これによって、人類社会は壊滅的な打撃を受けて
しまいます。

偶然だろうけれど、まるでこのところの現実の
事態を予見したかのようなストーリー展開になっ
ています。

第五番目の災厄は、地球外生命体が、人間に寄
生して、人類を殺戮しまくり、最終的に人類を絶
て消し去ろうとします。外見は人類と変わらない
ので、見分けることができません、

この映画の主人公は、平凡な女子高生。一連の
災害の中で、次々と両親を失い、たった一人の弟
とは生き別れになってしまいます。

数百キロ離れた場所にあるアメリカ軍の基地に
連れていかれた弟に会うために、少女は、「敵・エ
イリアン」の襲撃から必死に逃れながら、旅をし
ます。

その旅の途中で、出会った若者とともに危険な
状況の中、懸命に行動します。

一方、アメリカ軍の施設では、付近から集めら
れた多くの青少年少女たちに、「侵略者」と戦うため
の軍事訓練が施されます。

特殊なフィルターを通して見ると、エイリアン
が識別できるということも教えられます。

ところが、これは実はアメリカ軍に化けた侵略
者による作戦なのだということがだんだんとわか
ってきます。度重なる災厄を逃れた人々を、完全
に根絶やしにするために、子供たちを巧みに洗脳
して、兵士に仕立て上げ、人々を殺させようとす
るのです。

偶然この事実気付いた、一人の少年が数人の
仲間とともに、この企てを破壊しようとしています。

ここに、主人公の少女と青年が合流し、共に戦
いを始めます。

ここで、くだんの青年が実は侵略者だったとい
うことがわかるのですが、なぜか彼は人間の味方
をするのです。

途上国の紛争でしばしば見られる、幼い少年兵
の問題が下敷きにあるような気がする。子供は簡
単に洗脳されやすい。

また、物語の途中では、全く見分けがつかない

ために、誤って普通の人間を殺してしまうという事態も起こります。

現実の戦争の中でもこうしたことは起こりうること。

アメリカ軍が、実は「悪」という描き方も珍しいのじゃないだろうか。

「インディペンデンスデイ」に描かれたようなステロタイプな、地球パニック映画とは少し違うようにみえる。

絵にかいたようなスーパーヒーローが、地球の危機を救うという、なんとも薄っぺらな設定はちつとも面白くない。

この映画の監督が、若い世代だということも理由の一つであるの

このところ毎年、猛暑という言葉が当たり前になってしまった。

これが「地球温暖化」の影響なことは間違いな

いと思われる。

ところが、なぜかこれを頑なに認めようとしな

い、あるいははしたくない人たちが一定数いる。

北極の氷が解け、海水面が上昇することも否定

していた。

以前テレビに出て、コップに浮かせた氷が解けても、溢れ出さないから、海面に浮かぶ北極の氷が解けても海水面は上昇しないと、言っていた者がいた。南極の氷や氷河や万年雪が溶け出すことは想定に入れていない。

このようなエセ科学を、検証もせずにそのまま放送するテレビ局もどうかしている。

(彼らはその後どうしたろうか？果たして自分たちの誤りを認めたらうか？おそらくは、ほつ被り

して知らぬ顔を決め込んでいるのだろう。彼らは自分たちの誤りは認めようとしな

い。)

原発事故にしても、今回の新型コロナ・パンデミックにしても同じようにエセ科学でもって解説している者がいる。

彼らには、大企業が一番のお得意様なのだ。「地球温暖化」の原因とされるCO2の排出削減が、これ以上進んでいくと企業にとっては大きな痛手となる。

世論がそうならないようにと、あの手この手で懸命に擁護するわけである。彼らの大事な大事なカネヅルが、これでつぶれてしまつては大変だからである。

一日中、テレビではコロナ関連のニュースをやっている。

だいたい今日の感染者数から始まる。そもそも十分な数を検査していないから、数値が低く出て当たり前である。にもかかわらず、感染者が大幅に増えている。以前はアジアでもとりわけ低い感染者数だ、と言つて自慢いたが今はどうなのか？と言いたい。

若年層に広まったからだ、などと言っているが、そうした事態を想定していなかったのか？高齢者に感染が広まらなければ、若年層が新型コロナウィルスのターゲットになるのではないのか。

コロナ・ワクチンの有効性も90パーセント以上と言っていたが、今はどうなのか？ワクチンの接種率が50パーセント近くなつても、感染者数は減っていないではないか。実際の有効性はせいぜい50パーセントほどではないのか。

製薬メーカーが、正直なデータを公開するわけ

がないと思つている。コップの氷の例を引くんでもなく、都合のいいことだけを公開しているに過ぎない。

(私の書いたものを信用しない人が、なぜかこんなインチキデータを信用してしまう。困つたものだ。)

二回接種しても感染するものが出ています。ついには3回接種とまで言い出した。

製薬会社のデータをそのまま鵜呑みにして公表するなど、あつてはならないことである。

いわゆる、野戦病院式の臨時大規模施設も作られてはいない。もはや医療機関のベッド数は完全に足りなくなつていて。去年の時点で建設を進めていけば、今日の事態に十分に間に合つたはずなのに。今更検討だなどと、これは明らかに行政の怠慢でしかない。

オリンピックの成功で、コロナに打ち勝つなどといつていたけれども、打ち勝つたのでしょうかね。そもそも、成功したのですかね。

疫病の流行に、スポーツで打ち勝とうなんて馬鹿げた話でしかない。

(開催国がメダルを多く獲得するのは、至極当たり前の話。)

今回は様々な批判が噴出しました。アスリートの中からも、いくらなんでもこれはひどい、という意見が公になった。

関係者の感染もずいぶん出てしまつた。「安心安全な大会」とは程遠い結果だつた。

今回のおすすめは、

「寄る年波には平泳ぎ」

群ようこ著

2013年10月 幻冬舎

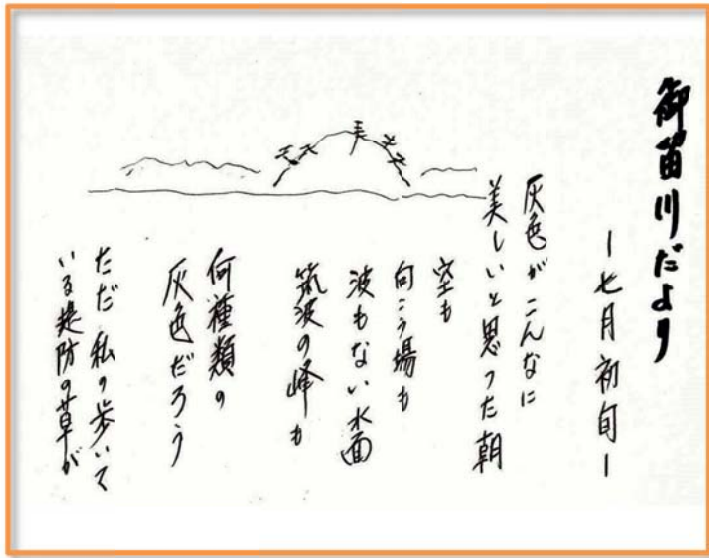
私の好きなエッセイリストです。多くのエッセイも書いていて、小説も書いている。無類のねこ好きでも有名である。そのせいもあって、私も猫好きになった。

〈正しい叔母ちゃん〉というタイトルでは、原発事故後の、トイレットペーパーの買い占めには、皮肉たっぷりエッセイを書いている。

東京にお住いになっている群ようこさんは、いかがお過ごしなのだろうか。

今回の新型コロナについてはどのような感想をお持ちなのだろうか。

【御留川（おとめがわ）便り】 伊東弓子



茨城県の難読地名とその由来 (17)

木村進

小堀 【おほり】 取手市

ここは小堀（おほり）の渡しとして有名な場所です。

平凡社の茨城の地名には、小堀（おほり）村は、利根川北岸に位置する井野村の飛地で、明治17年（1884）に独立して小堀村となった。また明治40年代の利根川改修によって村域は利根川の南岸となった。とあります。

また、江戸時代初期には井野新田といわれ、利根川の水運の基地として小堀河岸（おほりがし）が栄え、船頭などが500人もいた船頭のたまり場になったそうです。

昔は利根川がこのあたりで大きく蛇行していて、川の改修によって蛇行していた川の北側にあったこの河岸が改修したら南側に成ったというものです。

今は、利根川の少し離れて南側に「古利根沼」があり、この沼と利根川に挟まれた位置にあります。そして、ここには川の名残、また堤防が決壊した時などにできた小さな沼（お堀）があり、そのお堀を「おっぼり」と地元の人達が呼んでいて、それが「小堀」おほり」となったといわれています。

また利根川を利用した江戸まで物資を運ぶ水運においては、この小堀河岸は大きな役割があつています。

利根川を上流の関宿まで大きな船が航行するのが困難な季節（水量が少なかったりして）があり、

このようなときには、この船着場で底の浅い高瀬舟に荷を積み替える場所として使われたそうです。また現在もこの場所には利根川の兩岸を結ぶ渡し舟が運行されています。

これは南北に分断されてしまった小堀村の住民有志で始めたものだったようですが、今も定員「名ほどの小さな船ですが、1日7便（1時間に1本程度）が運行されています。（平成30年現在）（自転車も載せることが可能）

取手の名前については、ここに武将大鹿太郎左衛門の砦があつたことによるとされています。

また大鹿の名前も、平将門の子孫で承久の乱に功績のあつた織部時平の愛馬白鹿をこの地に埋葬したことに由来すると伝えられています。

直舢 【すうぶな】 龍ヶ崎市

龍ヶ崎の駅の南側の低地。西側が入地【いれち】という。

古代の地形を考えるとこのあたりは内海が広がっていたはず。

利根町側の「押戸」あたりから舟で今の市役所や流通経済大のあたりまで渡っていたと考えられる。するとこの直舢【すうぶな】という地名はどこからついたものなのだろうか。

入地は土を盛って埋め立てた所か？

でも直舢を「スウブナ」とは読めないが、どういう意味か？

★舢（ふな）と付く地名

- ・秋田県能代市二ツ井町仁舢（にぶな）
- ・茨城県龍ヶ崎市直舢（すうぶな）

- ・静岡県富士宮市羽鮒（はぶな）
 - ・三重県南牟婁郡紀宝町鮒田（ふなだ）
 - ・長崎県対馬市豊玉町貝鮒（かいふな）
 - ・大分県豊後大野市緒方町鮒川（ふながわ）
 - ・・・・みな「フナ」「フナ」ばかりだ。
- ★直をスの音で始まる読みの地名

- ・山形県飽海郡遊佐町直世（すぐせ）
- ・茨城県龍ケ崎市直鮒（すうぶな）
- ・新潟県三条市直江町（すぐえちよう）
- ・富山県富山市直坂（すぐざか）
- ・岐阜県大垣市直江町（すぐえちよう）
- ・岐阜県羽島市足近町直道（すぐみち）

やはり「すぐ」とは読んでも、「すう」と読む地名は見つからなかった。

当て字なのか、それとも方言での違いなのか？
また、角川、平凡社の地名辞典、そのどちらにも載っていない。

フナⅡ鮒 という言葉の語源を調べてみると、フナⅡ田んぼ ナⅡ魚 だとして、田んぼの近くにいる魚だといふ。

魚に付くと書くのは、フナがお互いにくっついて泳ぐとか、釣るのに食い付きがよい魚だとか言われている。

土木内【どぎうち】

上土木内町【かみどぎうちちちよう】 常陸太田市
下土木内町【しもどぎうちちちよう】 日立市
土木内村（どぎうちむら）は江戸時代から久慈川の北側（左岸）にあった。

元は1村であったが、川の上流側が上土木内町（かみどぎうちちちよう）で常陸太田市、下流側が下土木内町（しもどぎうちちちよう）で日立市に分かれた。

平凡社の茨城の地名によると、名前の由来については伝承として次の2つの話が伝わっているという。

（1）源義家（八幡太郎）が奥州出陣のときに、久慈川を渡るのに難渋して、その一帯の樹木を伐採して土木工事をしたこと地名と成った。

（2）南北朝で争った1336年に北畠顕家（あきいえ・畠親房の長男）軍が義良（後村上天皇）親王を奉じて鎌倉に向かうとき、村人の助けを借りて土木工事をしたことから名づけられた。

ともに、名前に「土木」の漢字が使われているので「土木工事」が名前の由来であるというが、各地にある八幡太郎や南北朝の伝承話をつけての話には信びよう性は少ない。

土木内村の名前は江戸時代初期の1635年の水戸領郷高帳に記載があるのでその前から存在しているという。この村の場所は久慈川に常陸太田の方から流れてくる里川が合流する地点に近い。

昔の縄文人、アイヌ語族は川を遡って、このように大きな川に里川が合流するのではなく、分離してその先に山があるという考えだったという。

そして川は「ベツ（別）」または「ナイ（内）」とあり、比較的小きな川や沢は「内（ナイ）」の方向に使っていたという。

土木内Ⅱドギウチとはいったいどのようなことが発祥なのだろうか？

郵便番号簿で「土木」と書く地名を探してみたがヒットしなかった。

では土・木内という区分ならどうか？ 土ⅡドⅡトウ なら場所や畑などを指す。

木内は千葉県の香取に木内（きのうち）というかなり古い集落がある。木の内Ⅱ紀の内 かもしれない。

しかし、地図を見るとこの場所は久慈川や里川に関連する地名と感ずる。

すると 内ⅡウチⅡナイⅡ川、沢という古代語（アイヌ語）と考えることもできそうだ。

すると土木ⅡドギⅡ土器などが語源にかかわっているかもしれない。
またはドギメキなどの例にあるように川の流れの音が語源とも考えられる。

古代の人たちが久慈川をさかのぼってきて、大子の方に行く久慈川と常陸太田や里見の方に行く里川に分かれる場所にどのような意味合いの名前を考えて呼んだのかは今となっては想像するのみであるが、土木工事とはおそらく関係しないであろう。

長高野

【おさこうや】 つくば市

1595年の知行目録には「おさかうや」とあり、筑波台地の中央部で、谷田川の水源地になるという。水守（みもり）の南に位置し、西側には「西高野（にしこうや）」がある。

高野ⅡゴウヤⅡコウヤ は高野山の名のとおり高い野原を意味していると考えてもよさそうだ。また宗教的な意味合いから「高野山」に関連つけて多くの地名にも使われたのだと考えられる。

では「長Ⅱオサ」とはどのような意味なのか？

北海道はじめ「長〓オサ」の付く地名は全国にたくさんある。しかしどれも「長い」という意味のものは少ないようだ。

北海道のアイヌ語地名で「長〓オサ」を調べると

- ・北海道千歳市長都（おさこ）
- ・北海道雨竜郡幌加内町長留内（おさるない）
- ・北海道勇払郡むかわ町穂別長和（おさわ）
- ・北海道沙流郡平取町長知内（おさない）
- ・北海道河東郡音更町長流枝（おさるし）

などがあり、北海道のアイヌ語地名研究の山田秀三氏の解説では「長都〓オサツ〓o-sat-nai〓川尻・乾く・川」だという。昔沼があつて夏になると乾いて舟をこぎだせない場所であつたとの解釈ができるという。また「長留内〓オサルナイ〓o-sar-un-nay〓川尻〓〓原・ある・川」だという。sat〓乾く、sar〓葦原 となる。

水守【みもり】 つくば市（旧筑波町）

角川の日本地名大辞典によれば、地名の由来は、日本武尊が東征の時、当地に泉（現在垂河【たるか】と称される）を得、その水が清澄であるため水守を置いたことにちなむという。縄文中期の水守明神遺跡がある。

平安中期には「水守郷」という郷名が常陸国筑波郡にあつた。

この「水守」については、和名抄に書かれており、読みは高山寺本には「三毛利」、東急本には「美毛利」とある。

またこの地の昔の歴史を見ていけば必ず出てくる地名で、平将門の乱のときに、将門に対抗した常陸大掾（だいじょう）方の拠点がこの水守にあつた。

平国香（くにか）はこの近くの石田に居を構えており、水守にも館を持っており、ここが将門に対抗する人々の拠点だった。

常陸大掾伝記によると「水漏ノ大夫」と出てきており、常陸大掾氏が国香の死（935年）後、石田からこの水守に本拠地を移し、その後「維幹（これもと）」の時（990年頃）に水守から北条の多気（たけ）山麓に移つたと考えられている。

地名の由来が角川の辞書に書かれている日本武尊（ヤマトタケル）が清らかなる泉を発見して水守を置いたという話は伝説的な要素が強いのでないとしても、きれいな泉がありここを守るために「水守〓水部（もひとりべ）」を置き、この水を使つて田へ水を供給する条里制がかなり初期の段階からできていたものだと考えられます。

★水守 の付く地名

- ・茨城県つくば市水守（みもり）
 - ・石川県輪島市水守町（みともりまち）
 - ・静岡県藤枝市水守（みずもり）
- 3か所が出てきます。意味は同じような水を守る人たちのことのように思われるが、読み方がそれぞれ少しずつ違う。
- また、奈良県の法隆寺の近くに目安【めやす】という地名があります。
- ・奈良県生駒郡斑鳩町目安（めやす）

この目安の地名にまつわる昔話「目安の大根美人」に水守（みずもり）が出てきます。

★ミモリ、ミズモリ 地名

- ・宮城県栗原市高清水三森（たかしみずみもり）
- ・福島県白河市表郷三森（おもてごうみもり）
- ・青森県弘前市清水森（しみずもり）

常陸旧地考（15）

下巻（八）

菊地孝夫

○飛弾細江 ヒダノホソエ
万葉集十二巻に
白檀飛驒の細江の菅とりの、云々。
冠辞考に斐太細江は大和葛城のあたり、または高市郡の巨勢などにあるならむといえるは、姓氏録に巨勢樋田朝臣の祖荒人に葛城の長田を造らしめ給いしという事がある。樋田樋という事の似るに依れるなり。いかがだろうか。
秋寝覚に常陸とし、藻塩草に常陸茨城郡と有り。されどいま郡中にある所を知らず。

○苧野橋 カルノノハシ
万葉集九巻に鹿島郡苧野橋別大伴郷歌云々と有り、その歌には鹿島崎より下総の海上津をさして、わくるよし見える。
さてこの苧野という地、今詳らかならず。里人に問えば、神池のあたりをすべてカルノといえりという。なおよく尋ねるべし。

風土記香嶋郡の条に郡南二十里、濱の里以東、松山の中一つの大沼所謂寒田とすべく四五里、鯉鮒万住む軽野二里所有田少くこれ潤う。軽野以東大海浜辺云々とある。

寒田すなわち神田なるべし

和名鈔に常陸國鹿島郡軽野郷あり。

後世の歌にカリノノハシと詠めるもこれなるべし

古来歌合に

月見ればしみわたるらむ鹿嶋なる

かりのの橋の秋の潮風

○裳羽服津 モハキツ

万葉集九卷に

筑波嶺に登り歌權せし日に作りし歌

鷺のすむ筑波の山の裳羽服津の

其の津の上にいざないて

乙女おとこの行き集い、云々

ありて裳羽服津はこの山にある地なり。

さて津は字書に水渡なり。また水會所など在于てもつばら水辺につきたる地なることは論なければ、

ツということは水辺のみには限らず、野山にまれ

いづくにまれ、人の集う地にて、津は即ち集いの

省きたるなるべくおもはる。

そは、陸奥國の会津は山国なるに津といい、上野

國の草津も山国にて温湯場なるに津といえり。また

近江國に粟津野あり。尾張國に萱津野原有。な

おあるべしゆえ、この裳羽服津も男女の集いて歌

權せし処なり。今ある所を知らず。

津濟のツも船の集う処を言う名なり文字をサンス

イに、イクに作りたるは多き。過去によりたるものなり。

寒田…神田、神社領地のこと。主に田圃

○霞浦 カスミノウラ

新後撰集に

ほのかにもしらせてしがれ東なる

霞の浦の海人の漁火

新後拾遺集に

ともにきて浮名やたたむあずまなる

霞の浦のけふりならねど

名寄類字名所集秋寢覚などみな常陸とす。今里人の言う処は浪逆浦のうち、土浦入りの方を指して

霞の浦といえり。

さてこの地のことは、行方郡香澄の条に言える今の富田村これにて、ここより信太浮嶋のあたり土

浦入をかけて霞浦といひしなるべし。

風土記の趣もかなり。

○美奈乃川

後撰集に

筑波嶺のみねよりおつる美奈乃川

戀ぞつもりてふちとなりける

新後拾遺集に

つくはねのみねの桜やみな川

流れて淵とちりつもるらむ

百人一首玄旨抄陽成院の御歌の註に、美奈乃川の末は櫻川へ落ちるといえり。筑波ねより、真砂の下をくぐつて川とも見えず、一滴ずつ流れて末は

川となれり云々とみえたり。

さていまこの山の中ならば仮に聊かなる清水流れ

ありこれなむ美奈乃川なりと里人云い伝う。いま

の世に、水無の川と書くもこれによるなるべし。

○櫻川

後撰集に

常よりも春べになれば櫻川

花の浪こそまなく散るらめ

名寄藻塩草類聚名所集などみな常陸とす。この川、

みなもとは茨城郡楸柄山の麓の鏡池より出て加茂

部村を流れ、真壁を経て筑波山の麓の美奈能川に

合流し土浦の錢龜橋に落ち霞浦に入る。

さて加茂部村の川辺に桜の古木どもなみ立て、花

の頃はいとよき眺めなり。

○戀瀨川

新後拾遺集に、

戀瀨川浮名を流す水の上も

袖にたまらぬ涙なりけり

新後拾遺集に

水の上の 泡と消えなば戀瀨川

流れてものは想はざらまし

壬生二品集に

戀瀨川つれなき中に行く水は

年もせかれぬ涙な里けり

名寄、藻塩草、類字名所集、秋寢覚等々に常陸と

す。今ある所を知らず。

國誌にもある所を知らずとあり、その頃早く知ら

れずなりにけん。

新治郡を西より東に流れて高浜の海に落ちる川有。

これ風土記にいわたる信筑乃川なり。この川を戀

瀨川なりと土地の人言えるは、無下に近世のこと

なり。

これは、中津川橋の架け替えを公に願うとき、名高き川ならでは宜しくないと、村長ら図つて戀瀨

川なりと書出ししなりと。そのこと目の当り知れる老人〔今年文政十年（1827）六十ばかりの人〕語りき。

いま案ずるに茨城郡大谷村の河の川上に碁石沢という在り。細かなる石多し。このごいし沢はこいせ川の訛りではないか。こひし、とこひせと、とても近い。さればこの大谷川、いにしえの戀瀬川なるべし。なおよく尋ねるべし。

○高間浦

続古今集に

よそに見て袖や濡れなむ常陸なる

高間の浦の沖津白波

堀川百首に

雲霞高間の浦をこめつれば

覚束なしや海人のとも舩

鹿嶋宮の東の海辺を高間原といい、風土記に高松浜若松浜などある同地成るべし。

○小野御牧

新千載集に

常陸なる小野の御牧の露草の

うつしは駒のおくにぞありける

國誌に按ずるに延喜式に、常陸信太牧は類聚名寄に云う小野御牧、しか之即ちこれ、牧信太郡に属す明らかなり。今筑波郡に属すは、後人いわゆるのみあるに曰く信太郡小牧村在り、即ちいにしえ、御牧云々と見えたり。筑波郡に属というものは清滝村近く小野村有。これがまた小牧村ありとあるは、いまさる村名きこえず。小坂村というあり、これがまた河内郡にて利根川近く小巻村在り。いま按ずるに上の小野郷条に言える如く河内郡の

小野村なるべし。信太郡近し

○柴浦

夫木抄に

海士のたく柴の浦風吹くまに

煙と見えてたつ千鳥かな

柴浦は秋寝覚に常陸と有りと、いま今ある所を知らず。早く廃れしなるべし。

いま按ずるに行方郡の末つ方に、上戸村のうちに芝宿というあり、このあたりをいったものか。また、信太郡の浮島村の下をシマウラといえる。また、しと通じていう事多ければ、此処に、これは鳴裏の意なるべし。

○信太浮嶋

名寄鈔に

浦風に潮道のうえも切り晴れて

月になりゆく信太の浮嶋

信太浮嶋、常陸〔國誌〕に載せたり。今の浮島村これ也。風土記信太郡の条に乗濱の里、東に浮島有〔長さ二千歩広さ四百歩〕四面絶海 山野交錯、戸一十五、畑七八町余、居所の百姓は火塩を業と為す、云々とみえたり。

○會瀬浦

おうせのうら

名寄鈔に

棚織のあふせの浦による浪の

よるとは知れど立ち返りつつ
秋寝覚藻塩草なども常陸とする。今久慈郡助川村近くに會瀬村在り、これ成るべし。

石岡地方のよもやま話

木村 進

(1) 石岡は古東海道の終点都市

3年ほど前にブログに書いた「石岡地方に関するよもやま話」を今回紙面に余裕があれば時々紹介したいと思う。

常陸国は大和朝廷の東国進出に伴い、大化の改新（645年）の直後、またはもう少し後の7世紀後半頃に成立した国と考えられています。

そして大和朝廷は大和の五畿内（大和、山城、河内、和泉、摂津）から七街道（東海道、東山道、北陸道、山陽道、山陰道、南海道、西海道）という大和朝廷の勢力範囲にあった国々を結ぶ街道を整備しました。この街道はそれぞれの国の国府をつなぐものとなりました。

常陸国はこの中の東海道（江戸時代の東海道と区別するために古東海道と呼びます）の国となり、現在の石岡が常陸国の国府であったため、石岡（常陸国府）は古東海道の終点都市となりました。

古東海道の国とその国府は、伊賀国（伊賀市上野）、伊勢（三重県鈴鹿市広瀬町長者屋敷）、志摩（三重県阿児町）、尾張（愛知県稲沢市）、三河（愛知県豊川市）、遠江（静岡県磐田市）、駿河（静岡市）、伊豆（三島市）、相模（海老名市）、甲斐（笛吹市春日居町または三坂町）、武蔵（東京都府中市）、安房（千葉県南房総市（旧三芳村）府中）、上総（千葉県原市）、下総（千葉県市川市）、常陸（茨城県石岡市）となります。

江戸時代の東海道は江戸日本橋から京都三条大橋

までですから中間部を除くとかなり違いがあります。また大きな違いは東京湾を船で渡っていたことや、富士山の噴火で一時ルートが変わったこと、また武蔵国が最初は東山道に属していましたが、行き来に不便であることから東海道に組み入れられましたことなどです。

東京湾は横須賀市の走水から千葉県の富津岬、木更津あたりに渡っていたようです。このため奈良などの都に近い側が上（かみ）となり上総国となり遠い側が下総国となりました。

これらのルートは大化の改新（645年）より前の4〜5世紀頃から徐々に固定されていったようです。こうした事実を知っていくと今の歴史の見方が変わってきますので面白いですね。

私は元々暗記科目が嫌い、歴史も受験科目では好きになれなかった科目ですが、これを知って、歴史好きに変身し、このような「埋もれた歴史」などを探るようになったのです。

ただ、この律令制が始まってこの古東海道の16km置きに設置されたという駅家（うまや）がどこにあったのかよくわかっていません。伝令に使った鈴を奉納したという鈴の宮神社（天狗党の決起したところ）はありますが、当時の駅家は馬を常駐していましたので水のみ場の近くであったはず。これに関しては、10年前に出された茨石の広報紙「ワクワク通信」の8月号に書かれています。6号国道の貝地の交差点の少し駅よりの西側少し高くなったところです。この狭い通りの脇にあるわずかな空き地に「月読神」と「庚申塔」の石碑が2つぽんと置かれています。

この場所には高浜の方から道が続いていました。土浦の方からではありません。そして霞ヶ浦（当

時は内海）を船でわたり、対岸の出島を通ったり、または美浦村や江戸崎の方に道は続いています。こんなことを感じさせてくれる駅家（うまや）がこんな形で知られずにいるのは残念なことです。

【特別企画】

打田昇三の太平記（12） 巻第六 1

○赤松入道圓心に大塔宮の令旨を賜る事

原本では「令旨」を「れいし」と読んでいるが一般には皇太子や皇后などが出す命令書を「りょうじ」と言った。その頃、播磨国（兵庫県南西部）に、赤松次郎入道圓心という武士が居り、第三十二代・村上天皇の子孫と称していたが村上天皇の第七皇子・具平親王から六代目に当る従三位季房の孫と言うから地侍に近い。此の人物が皇族の末裔に似ず武芸に長じた人物として知られていた。

当然だが誰かに使われるのが嫌で、何とか武名を上げたい。と思ひ此処数年間は大塔宮に従って吉野や十津川で苦勞を続けていたらしく、一旦は地元に戻っていた。この圓心には赤松律師則祐という子が居た。律師と言えば僧籍の者で有ろうから経でも上げて居れば良いものを、父親のように「戦争ゴツコ」をしていて、ある日、大塔宮から圓心宛ての手紙を預かって来た。

圓心が開いてみると「準備が出来次第に挙兵し軍勢を率いて朝敵を討ち取るべし。其の功有る者には申請により恩賞が与えられる。」と当然なことが尤もらしく書かれており、恩賞の内容も商店の売り出し広告程度に示されていたから「獲

らぬ狸の皮算用」で喜び、地元の佐用庄苔繩山に城を急造して協力者を募集したのである。

其の噂が近辺に広まったから恩賞欲しさで播磨近辺の武士団が集まり其の数が千余騎になった。是は古代中国で「秦」が衰亡し始めた頃に「楚」の陳勝という武將が反乱を起こした（呉広の乱）の例に異ならない。敢えて言えば統率された軍勢では無いから「烏合の衆」に近い。

其の連中は用心の為に近辺に關所を置き街道を塞いでしまった。当然ながら是により西国道が止まって敵ばかりか味方となる軍勢も争乱が起きている都へ行くことが出来なくなったのである。

○関東の大勢が上洛の事

動物は身を守る為に集団行動をとるらしいが、人間も動物であるから自分に有利な側に就こうとする。権力への不満も有って京都近辺から西国に掛けては、赤松入道のように幕府に反抗する勢力が増えて来た。常備兵力の少ない都の幕府機關は関東に援けを求めろしか無い。早馬（急使）当然、脚の速い馬で、を仕立てて関東へ報告した。

遊び暮らしていた北条高時も、さすがに驚いて討手（援軍）を派遣するように指示を出したから阿曾・名越・大佛・伊具など北条一族を始めとした関東八か国の有力武士団が一斉に動き出した。

具体的には千葉・宇都宮・小山・武田・小笠原・土岐・葦名・三浦・千田・城・佐々木・結城・小田・長崎・長江・長沼・渋谷・川越・工藤・狩野・伊東・安藤・宇佐美・二階堂・安保・南部・山城など各地域の武將百三十二人に率いられた三十万七千五百余の大軍が元弘二年（一三三二）九月二十日に鎌倉を發つて京都に向かったのだが、軍勢

が多すぎるから十月八日には先頭の部隊が京都に着いたのに、後陣の軍勢は未だ足柄山、箱根の天嶮を越えるのに苦労をしている状態であった。

そればかりか、四国からは河野九郎の軍勢が大船・三百余艘で尼崎港に着き、安芸・周防・長門からは二百余の兵船が兵庫港に到着した。陸路では東海道を進んだ部隊以外に甲斐・信濃の源氏七千余騎も中山道經由で東山に向い、北陸道七か国の軍勢・三万余騎は東坂本經由で都に入った。諺（ことわざ）にも「過ぎたるは及ばざるが如し」と言うが、多ければ良いと言うものではない。

戦場では無いので集まった武士団は京都中の家々を宿にしたが、総勢八十万と言うから市内に収容しきれない。京白河、醍醐、小来栖、日野、観修寺（かんじゅじ）、嵯峨、仁和寺（にんなじ）、太秦（うずまさ）から西山、北山、加茂、北野、革堂、河崎、清水（きよみず）、六角堂など民家はもとより堂塔から鐘楼などの建造物には軍勢が溢れ返っていた。日本国は小国だと言われているが、是程の人の多さか？と都の人々が驚いていた。

その中に元弘三年正月末になって、ようやく大軍を三手に分け、敵が籠る吉野・赤坂・金剛山の三城へ向かわせた。先ず吉野へは二階堂出羽入道道蘊を大将とする幕府直轄軍二万七千余騎が是も三手に分かれて向い、赤坂へは阿曾弾正少弼が率いる八万余騎が天王寺・住吉に掛けて布陣した。

更に金郷山へは陸奥右馬助が搦め手の大将となり二十万騎で奈良路から向かった。其の中の長崎悪四郎左衛門尉（此の場合の「悪」は「強い」と言う意味で使う）は別命で侍大将を命じられたが自分の勢力を誇示しようと一日遅れで出發した。

行列の先頭には旗・差し物（小旗）が並び、続

いて主の武士と是に従う武士団が通過したが其の数は八百余騎。長崎自身は交纏紋（古代から伝わる染色技法）で編んだ直垂、紫の鎧、金色で龍と白星で飾った兜、銀を磨いた脛当てなど派手な武装に黄金造りの太刀を二振り帯びて東国一と呼ばれた一戸黒と言う名馬に贅沢な飾りを施した鞍を置き、其れに山吹色の飾りを付けて三十六本の矢も銀で装飾したものを持ち、およそ戦場へ行くとは思えない華美な武装で都大路を進んだ。

大将が派手な格好をしているので従う家来たちも地味に…とはいかない。思い思いに工夫を凝らして祭礼行列のように従ったので都の人々は思いがけぬ出し物が見られたことになる。それら関東の軍勢は合わせて十万余騎、兜の星を煌めかせながら道中数十キロを支えるように布陣したので「この様な事は我が朝（日本）は言うまでも無く唐土、天竺、大元、南蛮（大陸諸国）でも未だに無かったことであろう…」と人々は噂した。

○赤坂合戦の事、附・人見本間抜け懸の事

関東から遙々とやって来た大軍は赤坂城などに立て籠る敵を攻めるのが目的であるが、其の数が多すぎるから全軍が揃う迄に日数が掛かる。先着部隊は一旦、天王寺に逗留していた。其処で合戦の功勞を公平にする為、大将の阿曾弾正が先着の部隊に対して「二月二日までは攻撃を開始しない様に！」触れを出した。抜け懸けをした者は罪に問う…という条文も付いている。

そう言われても、物見遊山や湯治に来た訳では無いから納得出来ない者も居る。武蔵国の住人である人見四郎入道恩阿と言う武士は、知り合いの本間九郎資貞に「…味方の軍勢は圧倒的に多く、攻撃

が開始されれば敵陣は間違いなく落ちる。然しながら冷静に考えると、北条氏が天下を取ってから既に七代：仕える武士としてはまで華々しい手柄も立てて居らず後期高齢者となった。この俣では臨終に際して未練が残る。其処で明日の合戦には先駆けをして一番に討死し、其の名を末代に残す覚悟である…」と密かな決意を語った。

是を聞いた本間は「確かに…」とは思ったが、「…無駄なことを言われる…是ほどの大軍が攻め込む中で、少しばかり先駆けをして討死しても、其れが高名（手柄）と認めては貰えないであろうから、無理をせず人並みに振舞うべきである…」と答えたので、人見四郎は不機嫌に座を立って寺の本堂に向かった。本間は是を怪しみ家来に後を追わせてみると、人見は懐中から筆記用具を取り出して石の鳥居に何やら書き付けて宿に戻った。

是を聞いた本間は「…さては、明日の総攻めに先駆けをして討死する覚悟！」と悟り宵の中から河原に出て待ち受けた。朝霧が晴れる頃に、南の方から紺色で唐風に飾った鎧を着て白い幌（矢除け）を背にした馬上の武士が只一騎、敵陣（赤坂城）に向かおうと現れた。人見四郎入道である。

本間を見た人見は「昨夜、決意を打ち明けたければ、孫ほどの人に出し抜かれることも無かったのに…」と笑って馬の脚を速めた。本間も是を追いつながら「…今は互いに先を争わず、共に屍（かばね）を曝（さら）し冥土（あの世）まで同道致（しましよう）」と言えば、人見も「申すに及ばず」と、二人仲良く後になり先になりして赤坂城に近づいた。早朝なので城内の者は気がつかない。

二人は乗馬を堀際まで寄せて共に大声で名乗りを上げた。「…武蔵国の住人・人見四郎入道恩阿、

歳は積もつて七十三歳：相模国の住人・本間九郎資貞、生年三十七：鎌倉を居てしより、戦さの先陣を懸けて屍（かばね）を戦場に晒さんと約して此処に同道した。我と思わん人々は出会いて手並みの程を「覽ぜよ！」

城内では見張番以外は未だ仮眠中だったが大声を聞いて驚き「源平一の谷合戦」の熊谷次郎直実を思い出したけれども、名前も聞いたことが無く外観から判断しても有名な武将とも思えない二人の武士が居るだけなので、此の程度の敵を相手にしても仕方が無い：と放つて置いた。

無視された人見は腹を立て「朝早くから来て名乗りを上げたのに抵抗もしないのは臆病なのか、我らを馬鹿にしたのか：その心算ならば武勇の程を見せてやろう！」と、無謀にも馬から降り堀に掛けられた狭い橋を渡つて城の木戸を壊しに掛かり是を本間も手伝った。城内では放つても置けないので櫓の上から一斉に矢を放った。狙われた二人は助かり様が無いけれども元より死を覚悟で怯むことなく共に討死をした。此の時に一人の僧が本間九郎本人から死後の事を頼まれていたので、赤坂城までついで行き、城内に申し入れて首を二つ受け取り天王寺に戻つて来た。

天王寺には、本間九郎の子である源内兵衛資忠が予め父親に呼ばれて来ていたので、僧侶は二人の武士の最後の様子を詳しく物語った。資忠は僧の話聞き父親の首を見て一言も言わず、涙に咽（むせ）んでいるばかりであったが、やがて形見の鎧を取り、馬に鞍を置いて出掛けようとした。それを僧侶が止めて厳しく意見をした。

「是は、如何なる考えでなされるのか？そもそも御尊父が此の度の単独城攻めを決意されたの

は其の武名を天下に知らしめ子孫に栄光有れと願われたからであろう。其の御遺志を顧みず、貴方まで討死されたならば、誰が御尊父の功を伝え恩賞を蒙るのか？子孫は無窮に榮えてこそ父祖の功を頭す道である：思い止まり給え！」是を聞いて兵衛資忠も涙を堪え、逸る心を抑えて鎧を脱いだのである。僧侶は本間の首を弔う為の場所を探し歩き、資忠は聖徳太子の廟に参詣して父親の霊が安かれと祈念してから何処かへ行こうとした。

其の時に天王寺の石の鳥居の前（神仏混淆時代なので寺院にも鳥居が在った）を通ると、本間と共に討ち死した人見入道が書き残した歌が有ったので「是こそ、後の世まで物語として留め置くべきである」と、小指を喰い切り其の血をもつて人見入道が血書した歌の側に自分の歌を書きつけてから父親と同じく赤坂城へ向かったのである。

城近くで馬から降りた本間資忠は敵の城門を叩いて「城中の人々に申すこと有り！」と叫んだ。二人の武士に早朝から攻め寄せられて寝不足な城兵たちは「：又か！」と思いつつながらも置けず城の上から覗いて見ると、今度は若い武士が只一騎で涙を流しながら立っていて、城兵に向かい「：今朝がた此の城にて討ち死した本間九郎資貞の嫡子・源内兵衛資忠と申す者：」と自己紹介をしてから「：（父親が）只一騎、討たれたので冥土への道に迷っているであろう：それを思い、私も討死をして共に冥土へ向かい親孝行をしたいと思つので城の木戸を開いて貰いたい：」と言う。

事情は分かるが、自殺願望は明白であるから城兵も気の毒で返事に困っている。しかし資忠の願いが余りにも熱心なので、城方では敵の要望に応じて城門を開き、障害物を撤去して合戦がし易い

様にした。喜んだか悲しんだか分らぬが本間資忠は城内に駆け入り五十余人の敵兵と戦つてから父親が討死した場所で、太刀を口に銜（くわ）えて自刃した。父親・資貞が無雙の武士で国の為に必要な人物で有り、息子の資忠は類なき忠孝の勇士で家の名誉を高めた。人見入道は高齢でも義の為に命を捨てたのであり、惜しむべき此の三人が同時に討死した：と知れ渡つたから、当人を知る人も知らぬ者も、多くの人々が嘆いたという。

彼らは言わば「抜け駆け」で赤坂城へ向かったのであるから、其の討ち死の知らせを聞いた攻撃軍の大將としては心中複雑なものがある。取り敢えず天王寺に行つて石の鳥居を見ると、左の柱に「花咲かぬ老木（おいき）の桜朽ちぬとも

其の名は昔の下にかくれじ」と歌が書かれ次に「武蔵国の住人・人見四郎恩阿、生年七十三、正慶二年二月二日赤坂城へ向かいて武恩を報ぜん為に討死仕る：」と記されていた。

更に右の柱にも明らかに別人の文字で歌があり、「ましてしばし子を思ふ闇に迷うらん
六の街（ちまた）の道しるべ（案内）せん」とあり「相模国の住人・本間九郎資貞が嫡子・源内兵衛資貞、生年十八、正慶二年仲春二日、父の死骸を枕にして同じ戦場に命を止め畢（おわ）ぬ：」と記されていた。この場合の「六の街」とは仏教で言う「六道（六つの迷界）Ⅱ地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天」のことであるが、十八歳の兄ちゃんに死後の案内が出来る筈は無い。然しながら、其処まで思い詰めた心境は気の毒であるから人々は同情の涙を流した。

其の事に刺激された訳でも無いが、幕府軍は阿曾弾正少弼（あそだんじょうしょうひつ）Ⅱ軍人だ

と少将に相当する高官)に率いられた八万余騎の大軍が赤坂城へ一斉攻撃を掛けたのである。小城であるから城の周りは敵だらけ、威嚇する鬨の声だけでも山を動かす様な喧しさである。

此の城は三方向が断崖絶壁で南が平地に続いてるので其処に堀を切り、櫓を構築していたから攻めるのは容易で無い。近寄れば忽ち矢が飛んで来る。攻撃の度に死傷者が五百、六百と出るので指揮官は後方で命令するだけなので安全であるから馬鹿の様に攻め続けた。城は落ちない。

或る日、攻撃軍の中から播磨国の住人・吉河八郎と言う武士が大将の前に来て次の様に言った。

「此の城は、幾ら力で攻めても落ちる城では無いようです。更にご数年の間に、楠正成が和泉・河内両国を支配して当面の食糧を確保したと思われまので、兵糧攻めも効果がありません。

此の城は三方が深い谷で一方だけが平地です。近くに高い山が無いので水が不足している筈ですが、火矢を射込んで直ぐに消されてしまいます。此の日頃、雨が降っていないのに防火用水が十分に使えるのは、南の山の奥から地中に水道管を通してある為と推測されます。そこで人夫を集め、山際を掘らせて見ては如何でしょう…」

言われた大将も納得して作業員を集め、城に続く場所を掘らせてみると地下二メートル程の所に粗末な木製の水道管が通っていた。一キロほど先の場所から湧水を引いていたのである。攻撃軍は其処を止めたので当然ながら城中では渇水状態となり、草葉の露で渴を凌いでいたけれども雨は降らず、代わりに攻撃軍の火矢が降り注いで来た。城中では「是まで！」と討ち死にを覚悟して一斉攻撃を予定したが、城の大将・平野将監が其れを

止めて「…暫く待ち給へ。今は西国も乱世であるから誰でも兵力が欲しい。降伏した者を直ぐに討つことはしないであろう。一旦は降伏して命を永らえ再起の時を待つてはどうか？」と言った。

言われたことは道理に叶っているので反論は無く、翌日の合戦最中に平野入道が櫓の上から敵軍に向かつて「…寄せ手の大将に申し上げる…」と呼び掛けた。寄せ手が有利な戦闘であるからは城内からの降伏申し入れだと直ぐに分かる。現代だと「白旗」を掲げれば良いのだが、負けたほうにも面子があるから、長い説明が付く。

城方では大将を指定したが、大将のほうは用心して渋谷十郎と言う武士に代理させた。平野入道は木戸口に出て来て渋谷に向い次の様に言った。

「…実は此の近辺では楠木正成が和泉・河内両国を支配して居ますので、私共も其の場凌ぎで鎌倉に抵抗しておりますが本心では有りません。此の事を京都(幕府方)に伝えようとして居たところを大勢(鎌倉方)に囲まれて已む無く交戦した次第です。其の罪を許して頂けるならば直ぐに降伏致します。しかし、それが叶わぬ場合には無力でも一矢報いて討ち死にを致す覚悟です…」

是を聞いた渋谷は「殊勝な申し出で喜んでおります。早速、本領を安堵する(反抗の罪は問わない)旨の幕府の御教書(赦免状)を頂けるように手配します。更に、功労者に恩賞も貰える手続きも致します」と調子良く答えたので、城に籠っていた将兵二百八十二人は待ち受ける悲運を知る由も無く、水源を絶たれた苦しさにも耐え切れず降伏したのであった。

ところが、合戦を止めた途端に長崎九郎衛門尉と言う武士が来て「降伏した者を受け取る作法」

と称し全員の武装を解き、太刀・弓などを奪い、更に嚴重に捕縛して六波羅(幕府機関)へ連行して行った。城方の者は「約束が違う！」と後悔したのだが、全ては諺に言う「後の祭り」である。罪人扱いで六波羅の幕府機関に連行された一同は「手向かった罰の見本」として六条河原で一人残らず処刑されてしまった。

此の話が伝わると吉野山などに籠っていた反幕府勢力は、苦しくとも降伏する道を失い死を覚悟して戦う他は無かった。「罪を緩めるは將の謀」と言われるが、幕府の無情さは反抗勢力の結束を固め、北条氏の没落を早めることとなった。

続く

ふるさと風の会会員募集中!

当会では、「ふるさと(霞ヶ浦を中心とした周辺地域)の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額2,000円。(会報印刷等の諸経費)

*入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

打田 昇三 0299-22-4400 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東 弓子 0299-26-1659 木村 進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0014 石岡市国府 4-3-32 (木村)

HP <http://www.furusato-kaze.com/>